

この人うご  
じょうあり

NPO法人「棚田LOVER R's (ラブーズ)」理事長の永菅裕一(27)は大学4年生だった5年前、卒業研究のテーマ「環境教育」を学ぶため、フィールドワークで県内各地の小・中学校を回っていた。

香美町の小学校を訪れたときのことだ。農業を営む田村哲夫さん(58)から、農林水産省の「日本の棚田百選」に選ばれた地元「うへ山」にある棚田の話聞いた。

「このままでは、あと5年で美しい棚田がなくなってしまう」。切々と語る地元農家の言葉が胸にしみた。

代々受け継がれてきた地元「宝」は守りたい。だが、少子高齢化などで過疎化が進む中、棚田で米を作る農家は後継者不足に直面している。農業だけで生き抜くことは難しく、嫌々継がせるわけにも

## NPO法人「棚田LOVER's」理事長

### 永菅裕一さん(27) ①



# 美しい地元の「宝」守りたい

いけない。美しい棚田の陰には、将来を考え悩む農家がい

た。これまでの研究で棚田保全

について勉強はしていたが、夕暮れ時に赤く染まる棚田

は、見たことのないほど美しいが、多くの人に棚田に興味を持ってもらうにはまず何をやればいいのか。メンバー

で意見を出しあった。「とにかく動き出さないと始まらない。自分たちでできることから始めよう」

初めてのイベントは、サークル発足から約5カ月後に学内で開催した「棚田米試食会」。棚田の現状に少しでも関心を持ってもらおうと、神河町と香美町で収穫された棚田米と大学食堂で提供している北海道産米を食べ比べてもらった。

保水調整や地滑り防止などの機能がある棚田では、昼夜の温度差が大きいため稲がゆっくり育ち、おいしい米ができるという。香美町や神河町で作られた棚田米を食べた来場者からは「つやがあっておいしい」「米の現状を考えるきっかけになった」などの感想が寄せられ、イベントは成功に終わった。

永菅は「棚田米は苦勞して耕す人がいるからできる。『いただきます』の大切さを感じてもらえた」と振り返る。

将来への手応えを感じた瞬間だった。

ながすが・ゆういち 平成21年、県立大大学院環境人間学研究科修了。在学中の19年5月、学内の有志を募り、サークル「棚田LOVER's」(市川町)を立ち上げた。22年3月にNPO法人化。若い世代向けの農作業体験活動の推進やブランド化した棚田米の販売などを通して、棚田による地域活性化を目指す。

ひょうご



# この人あり

棚田保全活動に取り組み永菅裕一(27)が平成19年、NPO法人「棚田LOVER's (ラバーズ)」の前身サークルの初のイベントとして学内で行った棚田米の試食会。このとき永菅らメンバーは参加者約50人に日本の食に関してアンケートしてみた。

## NPO法人「棚田LOVER's」理事長 永菅裕一さん(27) ㊦

# 都市と農村つなぐ理念 現実味



で、日ごろから自給率を不安視しながら買い物をする人がどれだけいるだろう」。安い外国産を求める心理は仕方のないことだが、このままでは将来的に国産の食料が危ない。

「自分が体験してようやく、漠然とした問題意識が実感に変わる」。初イベントでそう思ったとき、これまで以上にやる気に満ちていた。

「棚田を愛し、棚田を育む未来の子供たちのために」というサークルの理念を実現するため、もっと広いフィールドを舞台に活動することを決めた。

▲未来の子供たちのため、棚田を愛し、育む思いで保全に取り組み永菅裕一さん

まず大学という枠を抜け出した。20年4月、姫路市の二階町商店街に理念を伝え、「環境問題に関心を持ってもらえるようなイベントを開かせてほしい」と嘆願した。熱意は通じ、快諾を得た。

イベント名は「あそび、まなぼつ祭2008 in 二階町商店街―都市と農村を棚田でつなぐ」。香美町などで作った棚田米の試食会といったコーナーを設けた。二階町商店街の活性化を考え、空き店舗を会場に使うことで他店舗にも人が流れるよう工夫を施した。

当初は心配された人出は上々だった。当日募集した神河、香美両町の棚田での農作業ボランティアには約20人の応募があり、棚田米の予約も殺到した。予想をいい意味で裏切られたことで自信を深め

た。「『おいしい』以上に『棚田に興味を持った』という感想を聞き、活動が間違っていないという気持ちが強まった」

約6カ月後、思わぬ吉報が届いた。4月に場所を提供した二階町商店街が今度は自ら主催し「一緒に環境保全などを訴えるイベントを開きたい」と呼びかけてくれたのだ。

こうして、県立大学だけでなく地元の小・中学生、高校生や生産者が協力し、おそらく県内で最大規模の農業イベント「COMET(こめ)BACK棚田祭」が開かれた。商店街は前回以上の人出でにぎわい、参加した高齢の生産者からは「商店街のイベントは若者の農業に対するイメージ向上につながる。何より活気があって楽しかった」と感想も聞かえてきた。現世代と次世代の協力で「都市と農村をつなぐ」。

サークルの掲げる理念が現実味を帯びてきた手応えを感じた。

ひょうご



# いづい ん うど あり

働き盛りの現役世代と若い次世代が力を合わせて「都市と農村をつなぐ」ことを目標に掲げる永菅裕一(27)。地元で掲げる永菅裕一(27)。地元の大学サークルから始まった任意団体の「棚田LOVER's」(ラブーズ)は平成22年3月末にNPO法人化した。地元だけでなく、「日本の農業の裾野を広げる」という壮大な夢に向かい、大きな一歩を踏み出した。

だが、厳しい現状に変わりはない。農林水産省の統計によると、県内には約580の集落に棚田が約3千カ所(約4千畝)あるとされる。その4割程度が保全協定などを結んでおらず、誰からも管理されない放棄田になっているという。永菅は「田舎には農業の後継者が少ない」と憂う。そこで、今年から新たに市川町上牛尾の天然温泉「せせらぎの湯」の向かいに放棄田を活用した貸農園を作った。働き盛りの若者が都会に流出

## NPO法人「棚田LOVER's」理事長 永菅裕一さん(27) ①

し、交通の便も悪いため急激な過疎化に歯止めがきかない地域の活性化に向けた企画として来年4月開園予定で準備を進め、現在は農園借用の希望者を募集している。

活動は、棚田保全や棚田米試食会、貸農園だけにとどまらない。「農」「食」から社会を見つめる視点を養ってもらうおと、神戸市東灘区のカフェで毎月、棚田で米などを実際に作る農家らとの意見交

換会「農業カフェ」を開く。棚田の効率的な利用などの経済的な側面だけでなく、「何が何でも棚田を守り育てる」という強い気持ちを持つ大事さを農家や来場者らが話し合う場を設けている。

サークル時代から続くブランド米の売り上げも好調だ。現在販売中のブランド米は、香美町の棚田から生まれた棚田米コシヒカリ「棚田舞」(棚田から夢と希望が舞い上が

る)、棚田米ヒメノモチ「段々美味」(段々の田から生まれる米)など。それぞれの名前に意味合いを込めたユニークなブランド米で棚田の魅力を知ってもらおうとしている。

22年9月には「播磨富士」と呼ばれる笠形山のふもとにある棚田(市川町上牛尾)で取り組んだ稲刈り体験イベントの後、マンドリンやギターの演奏家を迎えて棚田コンサートを開催。日ごろから自然

と棚田のことを意識してもらえよう、こうしたイベントを重ねてきた。

軽いフットワークと柔軟な企画で行動する永菅。サークル立ち上げ当初は4、5人だったメンバーもNPO法人化した現在は約150人に増え、市川、佐用、香美の3町の棚田で米や野菜を作っている。「これだけの規模になるとは…。正直、学生時代には思ってもいなかった」と照れ

## 「農業の裾野拡大」実現へ前進



地域活性化に向け、放棄田を活用した貸農園の準備を進める永菅裕一さん

笑いを浮かべる。

卒業研究で美しい棚田を見てから、早くも5年が過ぎた。永菅は人生の分岐点となった香美町での思い出を振り返りながら、「5年前に味わった感動と地元農家の苦悩を胸に刻み、棚田の景観や現状に関心を持つ人が増えるように、できることを地道にやっ

ていく」

長い道のりはまだ始まったばかりだ。(文中敬称略、この項は桑村朋が担当しました)

ひ  
よ  
う  
い